

H27年献上米

エコファーマ認定
農事組合法人“王冠”において、
美味しい、“いちのくち米”ができるまで



編集年月日；2016. 02. 23



編集・印刷者；ima アグリサービス



農事組合法人 王冠

会長 安達 章 代表理事 川田 正

H18年4月25日登記 (大分県佐伯市弥生大字細田240番地2)

【はじめに】

組合員の長年に亘る努力により、地域に根付いた農事組合法人を作り上げた功績を賞賛し、地域農業発展の手本になることを期待して紙面に残すことにした。この冊子は、会長の安達 章氏、代表理事の川田 正氏、事務局の田原 俊秀氏から直接の聞き取り、及び関係資料を基に i m a アグリサービスで編集したものである。

1. 【農業法人設立の目的】

農事組合法人を設立した目的は、農業の規模拡大や省力化技術の導入、人材確保・養成に積極的に取り組み集落の農地を守り、集落に還元できる組織を目指す集落営農法人とすることである。



2. 【組織の推移】

25年前に設立、組織を変更・発展させながら栽培種の拡大を図ってきた。H2年に尾岩地域農業集団を設立し、共同育苗、4ブロックに分け植付け作物をローテーションする方式を採用した。県から番匠川の豊富な水の利用を考えて欲しいと要請を受け、アイガモ農法を実践したが、アイガモがカラス・イタチ被害に遭い、その上アイガモ殺処分ができなくなったので止めた（～H12年）。H7年に（1号法人）農事組合法人尾岩機械利用組合を設立し、共同育苗・田植え・防除など共同で行い、最初は益・正月に手当てを出す程度の状態であった。稲の減反政策による生産調整で、各農家耕地の3割に弥生地区特産品づくりの一環として、大豆栽培を行ない“道の駅”などに出荷した。耕作面積は3.5ha。H18年に（2号法人）農事組合法人王冠を設立し、小泉内閣の掲げる儲ける農業政策等の影響も受け農業経営し利益を出し給料を支払うようになった。麦の作付けを開始し、全耕作面積は8haであったが、H27年現在は15haまで拡大した。H19年に二らの作付けを開始したが、生育・収穫に手数が掛かる上に、利益が出ないので止めた（～H23年）。

3. 【農事法人の組織・運営】

現在の組合員数は36名で、弥生尾岩地区農家の大半が加入しており設立当時から大きく変わっていない。常勤の従事者数は4～5名、今の耕作面積ではこの人数で足りている。各農家の農事法人への提供耕作地は、各農家の自家消費目的で栽培している以外の耕作地である。耕作地の作物としては、WCSを4ha、飼料米を0.4ha、小作を2ha、“いちのくち米”を2.5ha、もち米を1.3ha（1haは契約販売）、大豆を3.5ha作付けしており、①現在の能力は、稲苗床6000枚が限度である。②稲作後に裏作として麦を植え、耕地利用率150%である。③麦・大豆栽培には

補助金が支給されている。また、組合を法人化することで次のような成果が見られた。①機械の共同利用、経営面積の拡大等により生産コストが低減した。②農業者の意欲、体力等に応じた農作業の実践が可能になり、生産意欲が向上した。③集落内の意思疎通の機会が充実し、集落が活性化した。



・水稻の播種/育苗共同作業



・新規二らの植え付け

4. 【農業法人へ取組みを振返って 安達会長に聞く】

将来の展望としては、「60歳までは外社会で働き、60歳過ぎたら集落で働け」を合言葉に集落営農を実践し20数年、誰が何時帰ってきてても、農業に参加できる仕組みが概ね整ったと考えている。次世代に、より良い組織を残し、地域農業を発展させるために、これからも役員、構成員一丸となって頑張っていくと思う。

5. 【なぜ献上米に】

なぜ、献上米に推薦されたかの質問に対しては、今年の該当地区は南部振興局であり、その中で本組合がH2年から法人として継続しており・組合員のまとまりが良い・美味しい米作り・味噌作り・生活改善などに取組み地域活性化に貢献している等で選ばれた。6年に1度の献上米儀式的様子はH27年10月29日皇居で天皇陛下の前で、お言葉を頂いた。県内では当地区の1件のみで、参加者は、安達さん、安達さんの奥さん、地区区長さん、大分県農林水産部集落営農室の井上さんであった。

安達会長が、短歌一句を詠った。 **“愛舞い 豊年海老が 泳ぐ田で 集落園場の 献上米”**

6. 【土壌改良植物活性剤“みみっこ”との係わり】

“みみっこ” = “バイオ耕太” (同一品で商品名が変わる)

を使い始めた理由は、H20年、佐伯JAから紹介された農家の田原高正さんに、EMW研究所の小椋が“バイオ耕太”を持ち込みイチゴに使用することを勧めた。田原高正さんは当時HB101も使用していたが、“バイオ耕太”を使用しその効果に関心を持ってくれた。安達章会長は、近辺でイチゴハウス栽培をしている田原高正さんからイチゴを食べさせられ、農薬を使用していないので洗わずにそのまま食べられ美味しかったことを今でも記憶している。“バイオ耕太”を使用していることを知った。稲作に使用することを思いつき実行したら米の食味値92点となり美味しかった。川田正代表理事は、自耕作地において10a当り化学肥料を40kg、追肥10kg入れているのに自分で作った米がまずい。安達章会長から“バイオ耕太”の紹介を受け、使用したら最初の年から味が変わり美味しくなったので驚き、感心した。土壌改良植物活性剤“みみっこ”の効果は、白根が多くなり強い苗ができ、病気に強くなり稲作期間中に農薬使用を2回に減らすことができた。“みみっこ”を使用し始めてから食味値は80点以下になったことは無く、消費者からは安全安心で美味しいとリピーターが増えている。

H27 特栽米	食味値	水分	蛋白	アミロース	米種
王00	82	14.1	5.6	19.0	ヒノヒカリ
王00	80	13.5	5.1	19.0	ニコマル
安00	82	13.9	5.3	18.1	ニコマル
川000	82	13.6	5.5	18.5	ニコマル
吉000	84	13.6	5.7	18.6	

7. 【土壤改良植物活性剤“みみっこ”の使用法】

稲苗床のビニールカバーをはがした後に“みみっこ”を300倍に希釈した液を、ジョロを使用して稲苗床に2回/月の割合でたっぷり散布する。根張り強化のためである。次に8月1日頃、20L/10aを田の水取入れ口から300ML/分の程度で入れる。次に稲花芽が終わり、稲穂が付く時に300倍に希釈した液を、葉面散布する。

“いちのくち米”の品質・特徴は、特別栽培米扱いの有機肥料を使用した一等米、減農薬で除草剤一切使用しないで、土壤改良植物活性剤“みみっこ”を使用している。

8. 【弛まない努力と気がかりな点および次の目標】

佐伯の“道の駅”を作る時に、市の産業課長から大豆の出荷を要請され、組合員の協力署名が必要となり、各農家を回り協力を要請し署名賛同を得ることができた。減反政策による大豆栽培をすると、補助金が交付されるので全て組合員に還元することにした。農事組合法人王冠は、会長は80歳、代表理事は67歳となり、後継者育成が課題である。会社勤め、市役所勤めの50～55歳の候補者は数名いるが、それまでの繋ぎをどうするかが現実の課題として持っている。機械化が進み、機械操作が出来るオペレーターも欲しい。年間を通した米の保管倉庫環境条件として、温度(14～20℃)平均17℃)、湿度(適正値%)の維持管理できる設備増強などである。安定した経営状態にするために、収益改善手段も設定・実施することも必要である。拡大したので米の食味値にバラツキが始め、数項目の栽培管理項目を決め、周知徹底することが必要になる。美味しい米；；評判が良い；；高値取引で“いちのくち米”の玄米の価格は11,000～12,000円/30kg・袋で“いちのくち米”の生産量は300袋=9000kgにしたい。無除草薬・特別栽培米が分かる高値取引先を求めている。次の目標は総収入3,000万円、米の反収500kg、麦の反収360kg、大豆の反収200kg、新規品目の栽培である。

9. 【地域の取り組み】

特に地域とのかかわりについては、常盤地域保全管理組合に属し、常盤水利組合及び隣接する自治会とともに農地・水路・農道の維持管理・補修等及び景観形成・遊休農地防止を行なっている。また農業者と自治会(非農家)と一緒に圃場を含む地域内の清掃活動を行い、地域内の環境整備を維持している。むかしからまとまりの良い集落であり、仲間意識が強く青年中心の尾岩会があり忘年会などの活動も盛んに行われている。

10. 【市・県・国に要望したいこと】

- ①圃場拡大する時の予算化処置。
- ②農業法人が継続できるように育成指導。
- ③社会保障の充実、勤務時間の固定化、最低給与保障の確立(若者の定着)

11. 【最近の表彰関係】

H16年に大分県豆類経営改善共励会優秀賞

H21年に大分県むらづくりの部優良賞；大分県食料農業農村振興協議会会長

H26年に九州地域環境保全型農業推進賞；九州農政局長

